

22 むかし魔女、いま大臣

「フィンマルク」は、サーミを表す「フィン」に、森林を表す「マルク」が合わさった言葉です。ここ「サーミの森」はもともと先住民サーミの土地です。

ヴァドソーで取材した人たちの多くは一様に「昔、このあたりで、すさまじい魔女狩りがあった。サーミ人が魔女にでっちあげられた」と語ります。ヴァドソーから2時間もドライブすれば、魔女裁判があったヴァルドゥーという町に行けると言うのです。

魔女裁判があった町

運よくNRKのクート・サンドヴィーク記者が、ヴァルドゥーに車で行くというので乗せてもらいました。

道のり約80キロ、フィヨルドに沿った国道E75をひたすら北東へ進むと、キーベルグというさびれた集落に。そこは第2次大戦でパルチザンがナチスドイツと死闘を繰り広げた村です。戦後の冷戦時代には親ソ派の土地という意味で「リトル・モスクワ」の烙印を押されてしまい、パルチザン闘士たちも80年代までは冷ややかな目で見られていたとか。

さらに北東に向かうと車のハンドルがとられるほど風が強まり、やがて灌木も消えて、バレンツ海からそそり立つ薄黒い巨大な崖が迫ってきました。荒涼とした岩棚に出たところで、車を止めてクートが言います。

「このあたりはドーマンと呼ばれる高地で、山には魔女や悪魔が住むとか、魔女が箒に乗って集まってくる、といった迷信が今もあって、立っているこのあたりは地獄の入口ですよ」

6キロのトンネルを抜けたら、そこは東経31度、ヨーロッパ大陸最東端の地、ヴァルドゥー港。E75の終点です。

クートが、港近くの建物の前で車を降りたので、私はコートをはおり深くかぶった毛糸の帽子のうえにさらにコートのフードの前をしっかりとめて、要するに目だけを出して、近くを探索。ヴァドソーやキルケネスどころではない烈

風でした。10分ほどで用事を済ませたクートは、「ちょっと先にヴァルドゥーフス城塞があります。世界最北の城塞ですよ。そこから、魔女を焼き殺したステイルネセ (Steilnese) という火刑場が見えるかもしれない」といって車を走らせました。



▲遠くの橋のような建物が、昔の火刑場の跡に完成しつつある魔女裁判モニュメント

魔女狩りが猛威を振るったのは17世紀で、魔女は城内の「魔女の穴」に監禁され、拷問で自白を強いられて、その拷問に耐えたとしても、城塞跡から500メートルほど先の火刑場に引っ立てられて灰と煙にされました。

サーミの悲しい運命に思いをはせていると、クートが私をせかします。「強風で道路封鎖になるらしい。早く戻ろう。今の気温はマイナス13度ぐらいだけど、この突風で体感温度はマイナス35度かな」

太陽が照っていたので、世界最北端の城塞と、遠くに見える「魔女の火刑場」モニュメント（2011年2月は未完成）を撮影しようと車のドアを開けて外へ出ると体ごと飛ばされそうな風。車の陰でカメラを取り出したものの、手袋のままではシャッターを押せない。はずすと指が凍えて動かない。酪農家セシリアの家で会った地元ジャーナリストは、寒風の中で手袋のまま撮影しながら「これはロシアの軍隊が使う射撃用手袋だ」と自慢していました。

こうして帰路につきました。

翌日、ヴァドソーの県立図書館で見つけた裁判記録『北ノルウェー、フィンマルクでの魔女裁判』（リブ・ヘレン・ウィルムセン、2010年）の「まえがき」に、こうありました（要訳は筆者）。

「たてまえでは拷問は禁じられていた。しかし、判決前に拷問で死んだ人々がいたことは、裁判記録で明らかである。当時、魔女であることの身体的特徴を証明しようとして、神の審判の名のもとに水攻めが使われた。水は悪霊を追い払う聖なる物とされた。魔女の嫌疑をかけられた人物は、手と足を一緒に結わかれて海に投げ込まれた。被疑者が水面に浮んだら有罪、海底に沈むと無罪だった」

つまり、魔女の烙印を押されたが最後、浮かんでも沈んでも殺されたのです。



▲魔女裁判モニュメントのオブジェ。犠牲者を悼んで狂気の歴史を刻む（2011年夏に完成）

役人は魔女狩りを昇進に利用した

17世紀当時、フィンマルク県の住民は3000人ほど。最も激しい魔女狩りのあったと言われているヴァルドゥー近辺には200人ほどしか住んでいなかったそうです。この過疎地で合計138人もが魔女裁判にかけられ、92人が刑死。拷問死や溺死の数は不明。ほとんどが、現在のヴァドソー、ヴァルド

ウー、キーベルグの住民でした。

この地方唯一の産業は漁業ですから、嵐は漁師の死活問題です。「魔女が嵐を起こした」という迷信で主に女性たちが生贄にされました。寒さに加え、底知れぬ貧しさ。それに疫病による死も多かった時代、「あんたなんか死んじまえ」と夫に毒づいたら（今だってよくあるセリフ）翌朝その夫が死んでいた、こんな場合も、その妻は魔女にされたそうです。地元ヴァランゲル博物館館長オーレ・リンダールセンの説はこうです。

「魔女狩りがヨーロッパを席捲した時代、フィンマルクの資料では、何年に何人の魔女が焼かれたという数字が残っています。それを見ると、フィンマルクに新しい官吏が赴任したときに、火あぶりが増えます。官吏は、魔女狩りを自らの昇進に利用したのでしょう」

NRKで働くドキュメンタリー映像作家でサーミ女性のトーリル・オルセンは、「手足をこんなふうに縛られて冷たい海に投げ込まれたのよ」と、私の目の前で、床にゴロリと仰向けに身を投げ出し、両足を高くあげて、その足首を両手で握るような格好をしてみせました。

「ノルウェーは当時デンマーク領で、役人はみなデンマークで教育を受けてデンマーク語を使いました。彼らは、ベルゲンから船で何日もかけてこのあたりに到着して荒涼たる風景に出会い、『ここは地獄への門だ』と思ったでしょう。当時の庶民の家には窓がありませんから家の中は真っ暗で、そこに栄養失調で歯のかけた貧しい人々がいました。寒さを耐えしのぐために身につけていた上着や靴には見たこともない奇抜な模様がほどこされていました。サーミ特有のデザインですね。言葉はサーミ語ですから、役人は理解できるはずもありません。『サーミは魔術使いである』と書かれた古書もあります。キリスト教文化とは全く異質の土地ですから、サーミ人は異端者そのものでした」

異質な人との共存共栄。これは現在のノルウェー社会が大切にしている価値観です。しかし、そこに至るまでには、異端者抹殺の暗い歴史があったことを思い知らされました（注1）。

サーミ解放運動の先頭に立ったエルサ

サーミ女性政治家のロールモデルと言われる、エルサ・ラウラ・レンベルグ

(Elsa Laula Renberg 1877-1931) の名も、この旅で初めて知りました。

ノルウェーの女性史資料によると、エルサは1877年、スウェーデンと国境を接するヌーラン県の森林地帯で生まれました。当時、サーミ文化は消滅の危機に瀕していました。

トナカイ放牧で暮らしていた両親は、当時としてきわめて珍しいことに、女の子である彼女に高等教育を受けさせました。彼女はストックホルムに留学して産婆教育を受け、政治集会にも参加。1904年、ストックホルムで世界初のサーミ協会を創設して代表に就任。同時に、『死か生か：ラップ人の現状についての真実の言葉』と題する小冊子を出します。サーミ女性初の出版物です。

小冊子では、サーミ民族の貧困、男性のアルコール問題、土地の収奪、子どもたちの教育を論じます。「スウェーデンの選挙権にはノルウェーにはない収入制限があってサーミの選挙権が制限されている」とスウェーデンの選挙制度を批判します。

その後、結婚して再びノルウェーのヌールラン県に住み、サーミ族の権利擁護を主張。女性に選挙権がなかった時代に、女性がその権利擁護運動の先頭に立つべきだと講演をして回り、1910年には初のサーミ女性解放運動団体「サーミ女性協会」を立ち上げます。

さらに1917年2月6日、トロンハイムで、初の北欧サーミ大会を主催します。開会演説をしたエルサは、サーミの権利擁護には「土地」と「教育」と「選挙権」が不可欠で、そのためには国境を超えた連帯が必要だと訴えます。スウェーデン代表も参加した大会は、サーミ政治史の偉大な1ページとなりました。

ノルウェー選挙が比例代表制に変わったのは1920年ですが、労働党に属していたサーミの運動家たちは、それ以降、サーミ党を創設して独自の路線を歩みます。エルサもヌールラン県のサーミ党リスト2番で立候補しますが、比例代表制といえども、できたばかりのサーミ党は惨敗。「数年後、サーミ運動家は労働党にもどった」と記録されています。

20世紀初頭は女性にとって冬の時代で、そのうえ「国民」として認知されたとは言い難い少数民族サーミですから、まさに厳冬期。彼女のことを「キチガイ」（ノルウェー語で *Sinnsyk*）と表現した新聞もあったのです（注2）。

少数者を守る選挙制度

1987年、ノルウェー国会は「サーミ法」（正式には「サーミ議会とサーミ法制度に関する法律」）を通し、サーミ民族の保護、サーミ語とサーミ文化とサーミの生活の発展が国の方針になりました。サーミによるサーミ議会の創設も

明記されました。

1989年9月、国会議員選挙と同時に、サーミ議会ができて、その選挙も行われました。ノルウェー国会はサーミ議会での決定を尊重する義務を負うことになりました。最大のサーミ救済政策は7500万クロネの「サーミ民族基金」を立ち上げたことでしょうか。過去の不公平な扱いに対する償いで、日本円にすると約11億2500万円。人口が日本の30分の1の国で、サーミ人は5500人、全人口約510万人のわずか0.1%であることを考えると、巨額です。

ノルウェーの2月6日は1992年から「サーミ国民の日」という祝日です。この日は、1917年エルサ・ラウラ・レンベルグが初の北欧サーミ大会を開いた日。ノルウェー全土でサーミ文化祭が繰り広げられ、スウェーデン、フィンランド、ロシアも歩調を合わせます。

フィンマルク県カラショークに創立されたサーミ議会には、全国7つの選挙区から比例代表制に基づいて39議席が選ばれます。9つの党派があつて、女性議員は19人(49%)。

日本にはアイヌ議会もありませんし、国会にはアイヌ初の国会議員として1期務めた萱野茂さんの後、誰も代表を出せていません。「アイヌ系議員」もいません。ノルウェーとの違いは、少数意見が抹殺されることのない選挙制度を持つか持たないか、の違いだと思います。



▲サーミ議会。壁画はサーミ人の土地と自然を表現。併設図書館にはサーミ語蔵書が3万冊以上

私は、運よく、ノルウェー地方議会選挙の候補者が決まる時期にフィンマルクに居ました。全国のすべての県の政党支部が「推薦会議」（ノミナシオンムート）を開いて、候補者リストを最終的に決める時期でした。

2011年2月28日付のフィンマルク県地元紙『フィンマルケン』には、「労働党、新しいドレスに」という見出しが躍り、ノミナシオンムートで決まったばかりのヴァルドゥー市労働党の候補者のリストが載りました。

男女2人の笑顔のカラー写真の1人は、候補者リスト1番目のロバート・イエンセン（男）、もう1人は、リスト2番目のエバ・リサ・ロバートセン（女）。そして、1番から24番までの候補者の氏名、生まれた年、住所。リストは、後日、しかるべき統一サイズの用紙に印刷されて、9月の投票日の投票用紙になります。

新聞には「ヴァルドゥー市の市長が決まった」とも書かれました。投票日は、半年後ですが、同市は労働党の金城湯池（現ヴァルドゥー市議19人のうち9人が最大政党の労働党）です。日本と違って議員内閣制ですから、市長は最大会派の議員から選ばれるので、よほどの事件がない限りロバート・イエンセンが次期市長なのです。

ノルウェーは、国会も地方議会も、4年に1回の比例代表制選挙で議員が決まります。投票日は9月の第1か第2月曜日と憲法で定められています。国会議員選挙と地方議会選挙は2年ごとに交互に行われ、2011年は地方議会選挙の投票日が9月12日。すでに述べましたが、政党は候補者リストを3月31日正午前までに選挙管理委員会に提出しなくてはならず、私が訪問した2月、3月は、政党にとって最も多忙な時期でした。

移民の美容師が市議会議員候補に

日本なら、候補者の一本釣りは当たり前ですが、ノルウェーに一本釣りはありません。各市の政党役員は、選挙の前年暮から年明けにかけて、自分の選挙区の次期候補者リスト案を練ります。

第21話の主人公、酪農家セシリア・ハンセンも中央党幹部として、候補者発掘に奔走していました。移民の美容院店主を「議員になって、町のために働いてみませんか」と説得し、承諾が得られた、と喜んでいました。

驚くべきは、政党の地方支部といっても、決して中央本部に隷属してないことです。農業経済学者であり、ヘードマルク県オーモット市長でもあるオーレ・グスタフ・ナルードはこう言います（『ノルウェーを変えた髭のノラ』p211～p212）。

「ノルウェーの政治に一番貢献しているのは地方です。政党の地方組織を『政党支部』と呼ぶのは、ノルウェーの現状からするとしっくりきませんね。支部では中央より下にあるかのようです。政党交付金は、国、県、市それぞれに直接支給されます」

ノルウェーの公職選挙法によると、市議候補者リストの人数は最大で議席数プラス6。定数25なら31人まで候補者を出せます。政党は、目いっぱい載せようと頑張るのですが、候補者は簡単には見つかりません。

ノルウェーの地方議員は、他に有給の仕事を持ちながらの、いわばボランティア。仕事や家庭の事情で立候補を断る人が少なくありません。どんな小政党でも最低7人を載せなくては選挙管理委員会に受付けてもらえませんから、党役員も必死です。

第20話でも触れたように、候補者リストは、年末から1月ごろに開かれる選挙区ごとの各政党の「推薦会議」(ノミナシオンムート)で固まります。党の役員、現職議員、議員経験者などで構成されます。セシリアが説得にあたった美容院店主の名もこの会議にかけられます。

リストは男女の数、職業、年齢、住んでいる地域が考慮されます。男女が半々近くになるように、職業があまりダブらないように、偏った世代が多くならないように、が前提です。

さらに、政党の綱領でクォータ制が決められています(第19話参照)。

その上で誰を一番目に載せるかが最重要議題となります。

くり返しになりますが、国会議員の場合、2、3月には、政党ごとに県の「推薦会議」(ノミナシオンムート)が開催され、市からの候補者リスト原案が提案されます。再度、全員で話し合っ、正式に候補者リストができあがります。

ノミナシオンムートは公開で、マスコミも招待されます。こうして、メディアを通して、全候補者の情報は確実にお茶の間に届きます。市役所のホームページにも全政党の候補者リストが公開されます。このリストが一定の様式を経て投票用紙そのものになります。

こうして9月までの約半年間に及ぶ長い選挙戦がスタート。この国には「選挙公示期間」はありません。7月には事前投票所があちこちに準備され、2カ月間も前に投票をすることができます。投票時間は夜9時まで。

投票日が近づくと、どの選挙区でも、全政党の代表(リスト1番目の候補者であることが多い)を集めて大討論会が開かれます。

日本の選挙の仕組みを話すと、だれもが「えーッ、国会議員の選挙運動期間

がたった12日間?」「えーッ、政党同士の政策討論会がないの?」「えーッ、戸別訪問できないの?」とげげんな顔をします。

当然ながら供託金なし個人負担なし

候補者個人が選挙に金を使うことはありません。もちろん供託金はありません。2009年秋、ノルウェーの女ともだち4人でコンサートの帰りにおしゃべりしていたら、4人のうち3人が「選挙に出たことがある」とわかりました。しかも、3人の支持政党が違うのです。市民の身近なところに政治があるのです。

政党が決める公約・マニフェストは、市議会で日ごろから論争になっているテーマが土台になります。比例代表制選挙の国ですから、政党は他の政党との違いを際立たせようと、躍起です。旗幟鮮明がいのちです。

本格的論戦はバカンスが終わる8月ごろから。テレビ討論会はもちろん、ショッピングモール、学校や公民館で行われる全政党の代表（リスト1番目が多い）の政治討論会も、その頃から始まります。

候補者個人は、有権者に名前と顔を売ったり媚びへつらったりする必要が、全くありません。私とは長い付き合いの左派社会党の前党首クリスチャン・ハルヴォルシェンは、育児休業中に国会議員に当選しました。選挙運動にはほとんど参加できなかったそうですが、これを可能にしたのが比例代表制なのです。

日本の選挙はどうか。

もう20年も前のことですが、都議会議員だった私は、選挙を4月に控えた正月、同じ選挙区の保守系議員から「一日30件の新年会があるんだよ」と聞かされました。市民派議員も、夜7時過ぎだというのに、「これから3つも回るんだ」と言いました。彼の手帳には、ビッシリと忘年会や新年会の予定が書き込まれていて、「ひとつにつき5000円から1万円は包まなければならないんだよね」とこぼしていました。

選挙前の夜の街頭演説会で、候補者の妻が妊娠中とすぐわかる大きなおなかをかかえて「主人の〇〇をよろしく」と土下座する風景を見たことがあります。「間違った選挙制度」をいただく私たち国民は不幸、というしかありません。

表2（p12）はフィンマルク県で私が訪ねた3市の現在の議員構成です。政党の多彩さに驚かされます。人口数千に、7つもの政党から議員が出ているのです。それに片方の性に偏ってもいないことは言うまでもありません。

国会議員選挙と地方議会選挙における全政党の得票率は表3（p12）のようです。国会は2009年、地方議会は2007年に行われた選挙結果です。

比例代表制選挙は、死に票がほとんど出ません。

これです！

これなら少数集団が政治から見放されることもないし、自分の投票が「死に票」になる心配もありません。

ビキニ姿の男性と髭の女性が議会に出現！

極寒の町取材の締めくくりに、私は、フィンマルク県庁に向かいました。副知事アン・ソールベイグ・スレンセン（労働党）が執務室で「ウェルコーメン」。



▲アン・ソールベイグ・スレンセン副知事

「フィンマルク県の現知事は男性ですが、副知事は私、見ての通り女性ですよ。前知事はヘルガ・ペデルシェン（女）でした。それに県職にも女性職員が多く、トップの幹部にも女性がたくさんいます」

広報担当官から渡された、『フィンマルク県男女平等統計』という冊子の表紙の写真に驚きました。男女が楽しそうに歌っているのですが、女性はつけ髭をしてネクタイ姿、男性は女性用のビキニの水着姿です。

「なんですか、この写真は？」と尋ねたら、知事の補佐官が説明します。

「県議会が始まる前に、議場で行われた県の『男女平等・多様化賞』授賞式風景です。国にも同様の賞がありますが、わが県は独自に男女平等・多様化賞を設けています。職種によって男女の数に偏りのない会社や、男女平等推進に役立つ商品を開発・販売している団体・個人から、最も賞にふさわしいひとつを選びます。受賞者には3万クローネと絵画の副賞。これに感謝の言葉を述べたりするのが通例ですが、この団体は、男女逆転社会を演出して、歌をうたいました。男女差別のおかしさを表現したのでしょう」

日本の格式ばった議会との何たる違い！



▲県議会の本会議場で行われた男女平等受賞グループのパフォーマンス

(シリア・アルヴォラ提供)

前知事のヘルガ・ペデルセンに会いたくなりました。

1973年、セル＝ヴァランゲル生まれ。サーミ人初の県知事で、その後、フィンマルク県選出の国会議員になってサーミ人として初の閣僚入り。漁業大臣でした。現在は、最大与党である労働党の副党首で次期首相の有力候補。ノルウェーの平等主義を象徴する人物です。

しかし残念なことに、私が滞在していた時期は育児休業中でした。2011年3月2日の彼女のフェイスブックには、こう書かれていました。

「タバ、3190グラムの女の子を産みました。産婆さんありがとう」

【表2】 党派別の市議会議員数

市(人口)	全(女)	女性率	労	進	保	キ	中	左	自	他
ヴァルドゥー(2396)	19(7)	36.8	9	2	1	0	0	1	1	2
ヴァドソー(6180)	25(10)	40	9	2	7	1	1	5	0	0
セル＝ヴァランゲル(9490)	25(13)	52	11	4	2	0	5	2	0	1

労：労働党

進：進歩党

保：保守党

キ：キリスト教民主党

中：中央党。

左：左派社会党

自：自由党

他：海岸党など地方政党

【表3】 ノルウェー全体における党派別獲得票の割合

	労	進	保	キ	中	左	自	赤	他
国会	35.4	22.9	17.2	5.5	6.2	6.2	3.9	1.3	1.4
地方	29.6	17.5	19.3	6.4	8.0	6.2	5.9	1.9	5.3

政党の正式名は表2と同じ。赤は赤色同盟のこと。

(注1) <http://www.architecturenorway.no/stories/photo-stories/eggen-steilneset-11/>

(注2) <http://www.stemmerett.no/tema/personene/renberg.html>